

まぼろしの「杉原紙」復活



○ 多可町観光交流協会育成部会 部員

宮崎 和明
門脇 かおる
大井 精道
松本 寿朗
足立 壽
西田 公世
佐藤 俊樹
大塚 貫哲

○ 紙芝居制作助言者

埴岡 真弓 (播磨学研究所研究員 (コーディネーター))
藤井 英延 (多可町観光交流協会会長)
安平 勝利 (多可町教育委員会・那珂ふれあい館館長 (アドバイザー))

○ 参考文献

「播磨の紙の歴史 杉原紙」藤田貞雄、
多可町文化財報告32「杉原紙総合調査報告書」多可町教育委員会

まぼろしの「杉原紙」復活

2020年3月発行

9場面

発行 多可町
〒679-1192
兵庫県多可郡多可町中区中村町123番地
電話 (0795)32-2380(代)

編集 多可町観光交流協会育成部会

イラスト 安倍 加織

印刷 ウニスガ印刷

①

まぼろしの「杉原紙」復活
すぎはらがみ ふっかつ

みなさん、「杉原紙」を知っていますか？

日本に昔から伝わる紙漉きの技術で作られる紙を、「和紙」といいます。原料は、コウゾやミツマタ、ガンピなど、古くから日本の山や野に生えている木や草です。

平成二十六年、三つの和紙がユネスコの世界無形文化遺産に登録されましたが、かつて日本各地でつくられていた和紙の中でも一番有名だったのが、多可町で生まれた「杉原紙」です。

多可町の小学六年生は、みんな自分で漉いた杉原紙の卒業証書をももらいます。

小学生「ちゃんとできるかなあ。」

研究所の人「だいじょうぶ。ほら、ゆっくりゆすつて。」

小学生「はい。これがぼくの卒業証書になるんだ。がんばろう。」

杉原谷小学校には「春蘭の家」という紙漉きのための施設があり、町内の中学生の卒業証書も杉原紙です。



③

播磨国では、奈良時代からよい紙が作られていました。多可町も播磨国にありましたが、「播磨紙」と呼ばれた紙がどこでつくられていたのか、それははっきりしません。

けれども、次の平安時代になると、京都の貴族の日記に「梶原庄紙」が登場します。およそ九〇〇年も昔のことです。

今の加美区にあった、杉原庄という荘園でつくられた紙が、京の都へ運ばれていったのです。

この荘園の持ち主は、そのころ大きな力を持っていた貴族、藤原氏でした。やがて、鎌倉時代になると、貴族に愛されていた杉原紙は、武士たちの間にも広がり、大切な書類や手紙などに使われるようになりました。

武士A「なんとなくすくて、やわらかい紙だ。そのうえ、この白さはどうだ。」

武士B「筆がよくすべって、墨あとも美しい。都の貴族がもてはやすわけだ」



杉原紙は、室町時代になるともっとも多く使われる紙となり、武士たちは正月などの正式な贈り物に杉原紙を用いました。この時代には、多可町だけでなく、他の土地でも杉原紙が漉かれるようになり、「加賀杉原」のように産地名を頭につけた杉原紙があちこちに生まれました。

「ここが杉原谷ですか。美しい杉山だなあ。」

「やっと、杉原紙の生まれ故郷に来たね。」

「ああ、この川は紙漉き村にとって理想的な川だ。」

昭和十五年、京都から、新村出、壽岳文章という二人の博士

が、杉原谷村にやってきました。

江戸時代まで和紙の代名詞でもあった杉原紙でしたが、明治時

代になると、杉原谷村ではコウゾを原料とする杉原紙は漉かれな

くなり、ミツマタを原料とする紙に代わり、大正時代になると、

紙漉きを行う家もなくなってしまいました。

そして、いつのまにか、杉原紙がどこで生まれた紙だったかも

わからなくなっていたのです。和紙に深い関心を寄せた二人の博

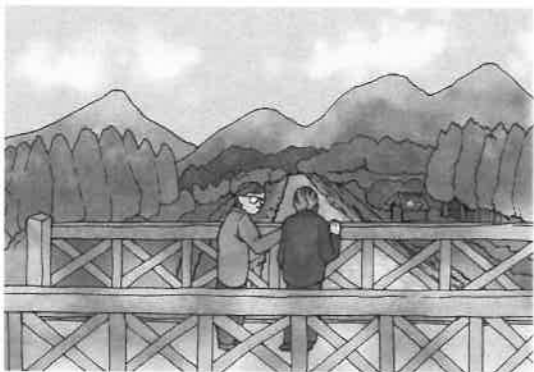
士は、杉原谷村こそ杉原紙が誕生した地だと考え、はるばるやつ

てきたのでした。

杉原谷村の村長さんや杉原谷小学校の校長先

生らとともに、博士たちを案内した一人が、藤

田貞雄さんでした。



藤田「そうか。杉原紙は、そんなに歴史のある紙だったのか」

藤田貞雄さんは、杉原谷の歴史にくわしい学校の先生でしたが、博士たちの話ではじめて杉原紙の大切さを知ったのです。

藤田「よし、杉原紙のことをもっと調べてみよう」

藤田さんは、この時から、一生懸命杉原紙の研究に取り組みました。

藤田「おたくでは紙漉きをしていたでしょう。紙漉きの道具は残っていませんか？」

家の人「そうやなあ。どっかに昔に漉いた紙が残ってるかな。」

紙漉きに使った道具や紙漉きの資料を探したり、紙漉きをしていた人たちから話を聞いたり、こつこつと研究をつづけました。

藤田さんの長年の研究の成果は、『播磨の紙の歴史 杉原紙』

という本になって残っています。



⑥

藤田さんの取り組みもあって、杉原紙の歴史を知り、その大切さをもっとみんなに知ってほしいと思う人たちが、集まるようになりしました。

A 「杉原紙は、日本の歴史のなかで、大きな役割をはたしてたんだなあ。」

B 「その杉原紙が生まれたのが杉原谷だってこと、もっとみんなに知らせねば。」

C 「ああ、ふるさとの誇りだ。そうだ、記念碑を建てたら、どうだろう。」

みんな「なるほど。そりゃ、いい考えだ。」

昭和四十一年、杉原谷小学校の校庭に、「杉原紙発祥之地」の碑が建てられました。



題字は新村出博士、そして、この碑の由緒を書いた碑文は、壽岳文章博士が書いてくださいました。

町の人A「発祥の地の碑は立ったが、杉原紙が今ないのはさびしいなあ」

町の人B「もう一度、杉原紙をこの町で漉くことはできないだろうか。」

町の人C「まぼろしの杉原紙を、われわれの手で復活させよう。」

町の人々の杉原紙に対する熱い思いは、役場の人たちを動かしました。

町長「この地で生まれた杉原紙は、むかしは、日本中だれでも知っている有名な紙だった。町にとって、これほどの宝はないじゃないか」

町長さんが先頭に立ち、「小さな町の大きな文化活動」を旗印にかかげ、杉原紙をよみがえらそうと取り組みました。

そして、昭和四十七年、とうとう、かつて紙漉きに使われていた清流、杉原川のほとりに、杉原紙研究所が建てられたのです。

研究所の開所式には、壽岳博士も招かれました。



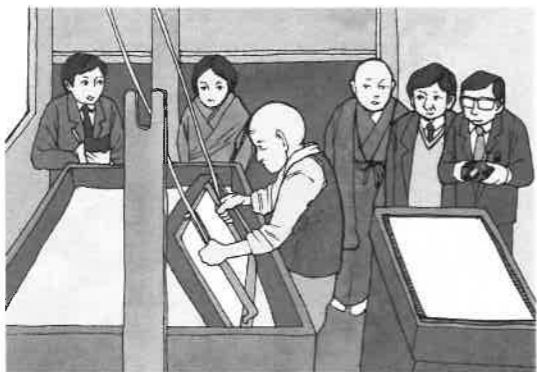
杉原紙が復活したのは、研究所ができる二年前、昭和四十五年のことです。

その紙を漉いたのは、若い頃に紙漉きをしていた宇高弥之助さんでした。弥之助さんは、昭和十五年、杉原谷村を訪れた二人の博士に自分の経験を語った人たちの中の一人です。弥之助さんの住む三谷は、江戸時代、杉原紙を多く漉いていたところでした。

弥之助「子ども時分は、コウゾを山からひいてきて、毎日すいとつたんやがな。もう、長いこと、紙はすいとらん。」

町長「あなたにしか、杉原紙は漉けません。ぜひ、お願いします。」

町長に頼まれ、弥之助さんは、家の納屋で、コウゾの和紙、杉原紙を漉くことに挑戦しました。



⑨
いま、すぎはらがみけんきゅうしょとなり、杉原紙研究所の隣には、壽岳博士の蔵書や博士が全国の紙漉き村を歩いて収集した貴重な和紙などが収められた壽岳文庫が建っています。また、研究所で漉いた杉原紙や、杉原紙で作ったさまざまの製品を売っている「でんでん」という施設もあります。

宇高弥之助さんがよみがえらせた杉原紙は、今も研究所で漉き続けられています。杉原紙は、昭和五十七年には兵庫県的重要無形文化財となり、平成五年には兵庫県の伝統工芸品になりました。一軒の家に一本コウゾを植える「一戸一株」運動など、町で原料のコウゾを生産するための取り組みも行われています。

卒業証書の製作だけでなく、全国に公募する杉原紙の年賀状コンクールも毎年行われています。アーティストの人たちにも働きかけ、作品展なども開かれています。

かつて都の貴族が愛し、次の時代になった武家たちにも認められ、なくてはならぬ紙として日本中に広まった杉原紙。復活した杉原紙は、多可町だけでなく、日本、いや、世界にとっても、未来に受け継いでいくべき大切な財産なのではないでしょうか。

おしまい

